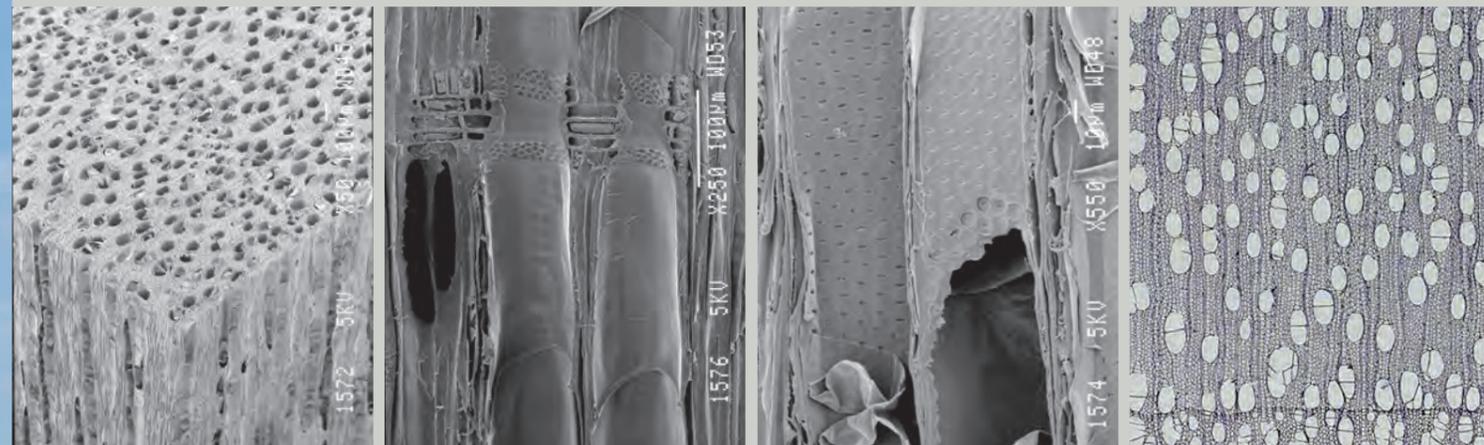


木材・合板博物館

PLY

木と人の素敵な出会いを探る



PLY 木の誌上展覧会 第31回 走査電子顕微鏡・光学顕微鏡写真「ヤナギ」



写真提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所

巻頭インタビュー ■ 第31回

日本の木造住宅の優れているところを活かし
パートナーとして共に作っていきこうという提案が大事

青木 謙治 一般社団法人 日本木造建築海外推進協会 会長

木アラカルト 19

寄稿—南洋材を求めて 木材輸入を支えた総合商社の最前線

谷山 順一 (元日本木材輸入協会会長)

ヤナギ科ヤナギ属の樹種の総称。ヤナギの種は世界で350～450あるとされるが、数を明確にできないのは交雑種が多いなどの理由で種の特定が難しいのが一因とされている(写真はバッコヤナギ)。一般にヤナギは北海道や本州、四国の比較的寒冷な地域の川辺に生えあまり大木にはならず高さも20m以下のものが多い。

木材の組織は、木口面で見ると数多くの道管が散らばった散孔材で、板目面で見ると放射組織は単列で針葉樹に似ている。しかし、柁目面で見ると横長だけでなく正方形や縦長の細胞も混じる異性放射組織であることがわかる。木材は成長が良いものが多いが、一般に密度が低く柔らかい。また、ねばりの強い性質があり曲げやすい木材になる。

半藤一利氏が随筆で柳について書いている(ぷらい日本史散策、文春文庫)。古代中国では離別の時に柳がつきものであり、柳の枝を折って輪にしてそれを去り行く人に贈るのが礼式であったという。また、ヨーロッパでも柳の輪飾りを着けるとはわが恋ならずと諦めることを意味しており、古くから同様に離別の象徴ということになっているとのことである。どうやら中国とヨーロッパでは輪飾りにするところがミソで、柔らかくそこら中にある樹木の中で一番手に入れやすく輪飾りを作りやすかったのが柳だったのかもしれない。一方、日本でも芭蕉が柳を題材に離別の哀愁を詠んだ句などがあるとのこと。日本の柳の代表格はシダレヤナギで、多くの日本人はその樹から幽霊、柳腰や柳髪を連想するであろう。日本では輪飾りよりも風にそよぐシダレヤナギの枝葉を眺めつつ感傷に浸っていたのかもしれない。

最後に古代遺跡のかまど跡などの炭化材を調べるとヤナギが頻りにみられる。水辺などの人の住むところには種類も多く広く分布して成長の良いヤナギは燃料材としてよく使われてきたためであろう。

木材・合板博物館 副館長 平川泰彦

PLY (ぷらい)

PLYとは重ねるという意味があり、WOODを加えるとPLYWOOD(合板)を意味している。歳月や経験を重ねることの重要性和、木材が年輪を重ねて成長する姿も重ね合わせている。



写真1 「令和6年度 第1回 日本木造建築海外推進セミナー」の様子。
(講師はライフデザイン・カバヤ株式会社の藤本和典氏)

一般社団法人
JTOP 日本木造建築海外推進協会
 The Japan Association of Timber construction for Overseas Promotion

日本の木造住宅の優れているところを活かし パートナーとして共に作っていきこうという提案が大事

●長く低迷する日本の木材や住宅関連産業は、市場を拡大し活路を見出すため、官民が世界に向けて様々な取り組みを行っています。その中であって、より大きな推進力を生み出そうと、日本企業が一丸となって日本の木造建築を海外に売り込む団体、一般社団法人日本木造建築海外推進協会(以下JTOP)が設立されました。今回、会長を務めておられる青木先生にお話を聞くことができました。まず協会の立ち上げに至る経緯を聞かせていただけますか。

協会の設立に至る背景

青木：日本が今、木材を一生懸命海外に輸出しようとしているのはもうご存じかと思いますが、それを推進する外郭団体に一般社団法人日本木材輸出振興協会※1(以下輸出協会)があります。林野庁の施策を実施すべく、様々な輸出関係の事業を取りまとめている機関でした。まだ私が東大に在籍する以前、前職の森林総研で私の上司だった方が輸出協会の事業に携わっていて、私がそのことに関わったのは、日本から中国に木材を輸出しようというのを特に一生懸命やっている時期でした。中国で使ってもらうためには、中国の建築基準法のようなものの中に日本のスギ、ヒノキ、カラマツのような樹種がちゃんと入ってこないといけない、向こうでは構造材としては使ってもらえない、そのためのいろいろな事業をやっていたんです。会議に参加したり、中国の研究機関での試験などを行っていました。そういった活動は実を結び、中国の基準を変える時に、日本の国産材木を受け入れてもらうことに成功しました。

そうやって徐々に輸出の範囲が拡大していきました。しかし、丸太を輸出するだけでは向こうで加工してしまいますから日本にはあまりお金が落ちません。それではちょっともったいないということです。できれば日本で加工をして、加工した木材を現地に売りたいということを考えています。おそらく日本だけではなく丸太で輸出するというのを、世界的にやらなくなってきたと思います。東南アジアの国々もそういうふうに変わってきた

たし、ロシアなども原木ではなく、単板とか製材した材を日本や海外に輸出するように変わってきました。日本も同じように付加価値を付けて売っていきこうという流れになっていきました。

さらにそこに日本の強みというか、技術力のある木造建築の構法、軸組構法ですね、それをプレカットした材料や金物などと一緒に売り込んで、海外で木造住宅を増やしていきたい、そのような輸出の仕方を模索していました。林野の補助事業で輸出協会が行っているのは、あくまで木材を輸出する事が主目的ですから、そこに住宅に絡んだ木材以外のいろいろな建材が混じっていると、ちょっと違うなという話にもなってきました。メーカーさんともまだいというか逡巡したのではないかと思います。木材だけではなく、技術とかも含めて木造建築全般を輸出していく。そういうグループが立ち上げられないかという相談がメーカーさん達からありました。今のJTOPの理事を成している会社ですが、そういう方々と、新しい団体をつくらうかという話で協議会が立ち上がり、昨年3月に一般社団法人になりました。

●やりにくさを感じていたメーカーさん側から話が持ち上がったわけです。

青木：そうですね。私は現在も輸出協会の理事ですので、補助事業の手伝いというか、委員になってくれないかという依頼は毎年のようにあります。輸出協会は林野庁主導ですから国策として木材を輸出することに注力しています。一方、JTOPはあくまでも民間主導で動き、我々がそれをサポートするという違いがあります。金物や住設、断熱材など様々なメーカーさんに売りに売込んでもらうことができます。

●なるほど。その時にはもう今の36社の会員企業さんはほとんど揃ってらっしゃったんですか。

青木：最初は20弱ですね。

●先ほど森林総研に在籍されていたとのお話がありま

※1 一般社団法人 日本木材輸出振興協会
 近隣の国々において、わが国特有のスギ、ヒノキを用いた木造住宅の住み良さをアピールし、丸太のみならず木造住宅部材(内装材等)の輸出に取り組む事業などを支援。木材輸入大国から、国産材の輸出へ転換を目指すため、国産材の輸出に関心のある地方自治体、団体、企業等を全国的な視点で支援する団体、企業等を会員とする専門の組織。



第31回

PLY

巻頭インタビュー

日本の気象条件は厳しい。最高気温は国内各所で40度を超える。北の地域の最低気温はマイナス40度に迫る。1時間50ミリを超えるゲリラ豪雨の発生件数は年300回を数えた。4枚のプレートが接する日本では、マグニチュード5.5以上の地震発生件数が世界第4位である。そして台風上陸数は世界第3位、厳しい。日本の技術は絹から始まり鉄鋼、電化製品、自動車を中心に、品質の高さで世界に認められてきた歴史がある。そしてこれからは日本の軸組構法の出番だ。過酷とも言える気象条件の中で木造建築技術は磨かれてきたのである。世界中が快適な日本の住宅に驚くはずだ。知恵を寄せ合い力を結集して住宅市場に挑む先導役を担い、多方面から業界をサポートする団体がある。

一般社団法人 日本木造建築海外推進協会 会長
青木 謙治

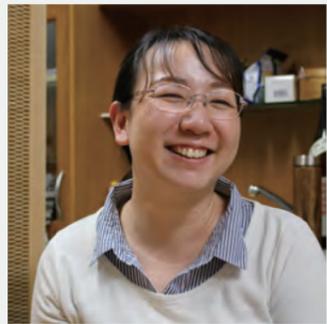


写真4 総務課長の吉村美穂さん



写真5 業務課長の瓦谷知則さん
事務局を支えるお二人は主に活動企画から実施、ガイドまで広く業務を担っておられるそうです。今回も活動内容について様々な説明をしてくださいました。

●日本の住宅がコンクリ、鉄に置き換わらず、建築木工技術が今日まで受け継がれてきたのはなぜでしょう？



写真2 広く国内外から講師を招いて行われるセミナーの様子。

写真3 第1回から第3回のセミナーチラシ。

●それは木造が鉄やコンクリートになってしまったということですか。

●それは木造が鉄やコンクリートになってしまったということですか。

設計の方は多くはいません。こちらでもやはり教育と
いうか、教えてかなくやいけない。設計の方法自体は、
例えばアメリカだったり、ヨーロッパだったりの基準が
当然ありますから、建物の耐震設計という意味では基本
的なやり方はそれほど違わないと思います。しかし細

なことは韓国に伝えてきましたが、実務を今まで伝えて
こなかったので、建築に携わる方が、どうやって動けば
いいの？ 何をすればいいの？ といった実務に直結
するような動き方をレクチャーするイメージです。例
えばプレカット工場を見学し、プレカット工場は想像で
きるけれど、このプレカット工場に依頼するためにど
うすればいいの？ といった実務面が伝えられてない
んです。じゃあどういう設計図を描いたらいいのかと
か、何をまとめたらいいいのかとか、組織はどういうのか
、そういう実務的な話ですね。そういう事が分かってく
ると、じゃあ日本式の建築物を韓国で建てようという
時に、準備を整えて、日本の誰かに発注をして、プレカッ
ト工場で作って、韓国に持って行ってっていう、流通が
生まれます。

人を育てることと木を育てること

●韓国には軸組構法を設計をされる方や、大工さんなど
は多くいらっしゃるんですか？
青木：大工は育てながらになると思います。最初のう
ちは日本の人が施工のやり方を教えにいかなくや当然
駄目です。現地で、ツーバイフォー住宅を建築してい
るところはあるので、そういう方々に最初は日本のやり方
を教えながらやっていくのだからと思います。骨組み
さえ造ることが出来れば、他の設備などは基本的には
同じですから。基礎もツーバイフォーと軸組みで違う
わけではないので、その辺のノウハウはある程度
持っていると思います。やはり一番違うのがいわゆる木
工事の部分で、軸組みとツーバイフォーでは全く違いま
すからね。日本からプレカットしたものを持ち込んで、
どういう順番で組んでいくのかと言う事は、最初はきち
んと教えないといけないと思います。



青木謙治 (あおきけんじ)

●一般社団法人
日本木造建築海外推進協会 会長
●東京大学大学院農学生命科学研究科
生物材料科学専攻木質材料学研究室
教授 博士 (農学)

一般社団法人 日本木造建築海外輸出推進協会
〒135 東京都江東区白河 2-14-2-407
TEL 03-5539-5331

●協会設立趣旨
オールジャパンの体制で海外向けの木造建築
の普及を推進し、企業の海外展開の支援、国
内の木造建築産業や木材産業、地域経済の活
性化を図ることが、海外諸国・地域の住環境の
向上、地球環境の保全、持続可能な社会の構
築の観点からも重要であるという考えを基に、
令和5年3月8日、「日本木造建築海外推進協
議会」を設立。海外向けの取組みを開始。その
後令和5年11月、「一般社団法人日本木造建築
海外推進協会」を設立。当協会は、企業の主体
性を重視しながら、海外市場における日本企
業の事業の育成と発展、海外における日本の
木造建築の普及、木造建築関連製品の輸出の
拡大に寄与することを目的としている。



協会Webサイト

かい設計方法などは国によっても違ったりしますので、
その国に合ったやり方を採用しなければいけませんし、
造るだけではなく維持管理ということも含めて考
えなければなりませんから、徐々に広めていく必要
がありますよね。最初は日本のやり方をベースに
アレンジしたものを教えていくのがスタート、徐々
にこの方々が分かってくれば、日本流のやり方から
少しずつ自国のやり方に変えていけば良いわけ
です。より良くしていつてもう、人が育てばそ
ういうことも出来るようになってくると思
います。

●韓国は近いですが日本のように地震があるんですか。
青木：日本ほどはありません。ただ数年前に震度5ぐ
らいの地震が発生し大変な騒ぎになって、台湾は日本
のように地震がある国です。そういう事があると、木造
は大丈夫なんですか？ そう思っている人もいますから、
「日本でちゃんと高い耐震性の家は全く倒れてません
よ」、「そういう高い技術があるんですよ」という説明を
していけば理解してもらえます。

地震が全く来ないのなら、あんなに壁要らないよと
か、柱もと細くていいよって、当然そうなると思
うんです。だから面白いんです。それらはその国に合
わせていくべきだと思いますし、そういう意味でいうと、
相手国ごとにルールが変わるはずですし、いろんなリ
スクも日本とは全然違ったりしますから。日本だと地震
と台風が脅威ですけど、東南アジアだったらそんな事

りシロアリの人が怖いとか、そういう可能性がありま
すからね。じゃあ防虫処理をどうするか、そっちの方
がもっと重要だねって話になるかもしれないですね。国
によってそういった事情が全然違うので、やはり国に
合った造り方、それをどう提案していくかって事が一
番大事な部分で、面白いところかなと思います。

●最後に聞きたいのは、このまま日本の木材需要が
順調に伸びていった時、日本はまた禿げ山になってし
まう心配はありませんか？
青木：今は国内で一生懸命使っていますが、成長量以下
の使用量ですからまだ増えています。だからある程度
輸出が増えても、まだびくともしないレベルではあり
ます。私もよく言っているんですけど、伐るだけじゃ
なくて、やはり植えるってこともやらなくては行けま
せん。今も再造林率が40%ぐらいしかないんです。そ
れって将来的にはもう適齢期の木が無くなるってこと
です。よって話ですから、そこはちゃんと伐つたら植
えるをやったり、そうやって今使えるものはちゃんと
使って行く。その使い道も、伐ってすぐ燃やすような
馬鹿なことではないで、ちゃんと建材とか、そういう
製品として使って、最終的にはエネルギーにする、そ
ういうカスケード利用が出来れば良いですよ。という
話は、講義や講習会で言っていますけど、すぐにそれ
をパーフェクトに達成するのはなかなか難しいです
ね。

※2 KOREA BUILD 2025

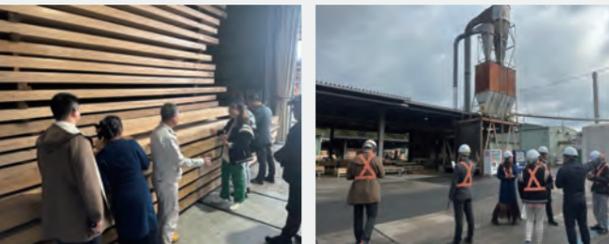
韓国の高陽で開催される建設・建築展示会。業
界間の連携とネットワークの活性化に向けた取組み
として、国内外の建築資材、技術、インテリアデザ
イン分野まで、建設と建築に関連するすべてを網
羅する総合展示会。



写真7 製材工場訪問ツアーで各社担当者の説明を真剣に聞く中国人バイヤー。



写真6 韓国から研究者を招いて木造建築見学ツアーを実施した。



その次の段階として会員に入ってくれたら、我々としては
とてもありがたい。JTOPのセミナーをきっかけに、横
のつながりをつくるような形になっていくと良いですね。
また、今県レベルで木材輸出に取り組んでいるところ
があります。その時に、自治体側は何をどう進めるか、
どういう人にコンタクトを取った方がいいのか分からな
いといった悩みを抱えている場合があるので、そういう
方々にJTOPがお世話しますという事をアピールして
います(写真8)。先ほど出ました海外のバイヤーを
国内で案内したように、今度は国内から海外の展示会
への出展などをJTOPがサポートしますよといったこと
もしています。今年、一部の自治体にそういう相談を頂
いてお手伝しているところです(写真9)。

セミナーからアカデミーへ

また来年の2月に、「KOREA BUILD」※2という大
きな展示会が韓国で開かれます。協会としてブースを
借りて日本の材料で組んだ建物のモデルを建てます。
そこには当然材料メーカーさんの材料を使い、金物メ
ーカーさんの金物を使い、さらにプレカットメーカーの加
工された木材を使う。そういうJTOPの理事会社の
技術が詰め込まれたものを展示します。我々の技術の
紹介などを内容とするセミナーの開催も計画していま
す。まずは1回、日本の木造を紹介するセミナーを実施
します。そして次年度、定期的に日本の木造の技術など
を学んでもらう講習会を開く計画をたてています。こ
れも韓国の人たちと相談しながら進めています。「JT
OPアカデミー」という名前前で、韓国のソウル市内で講
座みたいなものを全12回でやっていこうという構想で、
内容もかなり固まっています。韓国の行政をはじめ



写真9 台湾で開催されたTaipei Building Showにお
いて出展した木材協同組合連合会のサポートを行った。
(2024年12月12～15日/台北市)



輸出事業や
取組活動を
支援します。

- 市場調査
- 出展・販促
- バイヤー招聘
- セミナー開催
- 贈答活動等

ご依頼、お問い合わせ
JTOP 協会
〒135 東京都江東区白河2-14-2-407
TEL 03-5539-5331
E-mail: info@jtop.or.jp
Website: jtop.or.jp

我々にお任せください。

写真8 協会の活動をPRするチラシを
作成している。

寄稿 南洋材を求めて 木材輸入を支えた総合商社の最前線

●今からおよそ80年前、太平洋戦争が終わり復興の途にあった日本は、かつて経験したことのない経済成長を遂げた。国民は競って住宅を建て、住宅着工件数は1950年代から右肩上がり伸び続け、日本は木材資源を南の国に求めた。60年代に入ると枯渇していた国産材と入れ替わるように、輸入丸太が木材需要を満たすようになる。その大半を支えたのが主に南洋材のラワン※1と呼ばれた木材である。輸入企業が競って現地に人を送る中、交渉の最前線に立った人々がいる。膨張する日本経済に振り回された数十年を振り返り、貴重な証言を寄せて下さったのは伊藤忠商事株式会社で長く木材輸入に携わってこられた谷山順一さんである。今回その一部を紹介したい。



谷山 順一 (たにやまじゅんいち)

昭和 39年	伊藤忠商事株式会社入社
41年	シンガポール (サンダカン支所) 駐在
43年	シンガポール支店駐在 (サンダカン事務所長代理)
51年	リンパン (インドネシア) 駐在
53年	コタキナバル事務所長
56年	伊藤忠商事株式会社 大阪木材部南洋材課長 物産部門企画管理部長
39年	同社 代表取締役常務就任
平成 8年	同社 代表取締役専務就任
11年	同社 代表取締役専務就任
12年	日本木材輸入協会会長就任
13年	伊藤忠建材株式会社 代表取締役社長就任
17年	同社 代表取締役会長就任

Sarawak) 材を扱う大阪南洋材課があり
ました。勿論これら課の上に東京木材部
と大阪木材部があり、更に名古屋、札幌
等に木材を扱う課がありました。東京木
材販売サービスの当初の業態は合板の国
内販売を目的としていましたが、当時の
新建材ブームの中、業界からの各種新建
材の取り扱い要請に応じて、大きく業容
を伸ばし現在の伊藤忠建材の礎となりま
した。この分社化という経営手法は伊藤
忠の中で伊藤忠建材が2番目であり、分
社方式の大成功の例として評価されてい
ました。

私は商社が木材という商品を扱ってい
ることを知らず、ましてや学校で海外と
の貿易を勉強していたにも関わらず、木
材が輸入商品だということ全く知らな
い無知な新入社員でした。戦争中に焼け
野原になった大小の都市にとってその復
興の為木材は最重要輸人品目だという事
は木材部配属になって初めて知りまし
た。

1965年後半にサンダカン
(Sandakan) への上乗り (木材専用船の
船員という形で木材輸送全般を勉強) を
経験、そこで私の先々の業務は南洋材の
買い付けであり、その勤務地が東マレー
シア (ボルネオ) (Malaysian Borneo)
のサンダカンであることを知ることにな
りました。海外での仕事を夢見ていた私
は、勤務地が何処であろうと、扱う商品
が何であろうと、早く海外に飛び立ちた
い一心、同期2百数十人の内いち早く海
外駐在員として海外に出れることを知
り、ワクワクしながら赴任の命を待ちま

した。
惚れっぽい私を心配したオフクロの
たつての願いに負け、郷里名古屋でお見
合いせざるを得ぬことになり、その三度
目が今の家内ですが、会社には内密で結
納を交わし (女つゝ気のある奴は、過酷な
環境のサンダカンではしつかりした仕
事はできない!! そんな甘ちよろい奴は
駐在に出さない!!!、と常々部長さま
がおっしゃってましたので…… (笑))、
1966年4月に、初めての飛行機にワ
クワクしながら搭乗、大阪伊丹空港から
出発しました。まずは香港支店長に挨拶、
次に当時サンダカンの母店だったシンガ
ポール (Singapore) 支店の支店長と偶々
事務所に集まっていた各セクションの部
課長さん (全て私より年長) に挨拶、4
日間ほどのシンガポール滞在、その間に
ボルネオ生活のスタートに際して二つの
忘れられないことが起こりました。

シンガポールでの出来事 (1)

シンガポール店で開発案件を担当され
ていた松村先輩が私のガイド役になっ
て、中国人街、名門プキティマゴルフ
(Bukit Timah) (日本軍の戦勝地)、グレー
トワールド (キャバレー)、植物園など
案内していただきました (当時マラーイ
オンは存在していませんでした)。最年
少の私が僻地ボルネオに駐在すること
を知ると、松村先輩は、なんと、「自分
は1950年末のころ、伊藤忠の木材
部の創設者山崎さん (1979年専務
職で亡くなられた) がカランパヤン※2
(Kalamayan) とごく早生木のボルネオ

マレーシアサバ勤務時代

私は1964年4月名古屋大学経済学
部の国際経済学ゼミを卒業、同年伊藤忠
商事株式会社大阪本社に入社、直ちに
1961年伊藤忠木材部から分社化した
東京木材販売サービス株式会社 (現在の
伊藤忠建材) に1年間の出向を命ぜられ



図1 東南アジア主要都市図

での経済植林の調査に行かれた (このカ
ランパヤンは現在大建ビツツで早生木
として植林されている) とのこと。その
際若かった自分が山崎さんのカバン持ち
でサンダカンに同行した」と語られまし
た。松村先輩は若い私が、あの環境劣悪
で対日感情の悪いボルネオのサンダカン
に駐在することに憐憫の情を覚えられた
のでしょうか、以後私の伊藤忠生活には
常に松村先輩の暖かい情が感ぜられ、「お
い、谷山よ、今何処で、どんな仕事をし
ているか? 儲かっているか?……」。木材
部を離れた後の私のポジションは微妙に
松村先輩の意が入っていたのではないかと
思っています。尚、松村先輩は主に人
事関係を担当され専務職で伊藤忠を退
任、私が伊藤忠連合厚生年金基金理事長
を退任したと同じ時期に伊藤忠連合組合
の理事長を退任されておられます。

後年になって (故) 山崎専務ご本人よ
り、「俺が、日本軍に誅殺された名門の
関 (Kwan) ファミリーの長男、閩洛明
(Kwan Lok Ming) の墓に詣で哀悼の意
を捧げたのがきっかけで、木材部の大き
な取引先となった Kwong Borneo 社との
独占契約がスタートしたのだ」と聞かさ
れました。

シンガポールでの出来事 (2)

ホテルは伊藤忠シンガポール店
が手配してくれたアデルヒホテル
(AdelphiHotel) という2階建てのクラ
シカルなホテルでした。チェックインす
ると、なんと、創立1863年。トーマ
スラップルス (Thomas Raffles) により

シンガポールがジョホール (Johore) 王
国から分離され、英国海峡植民地 (the
Straits Settlements) (ペナン (Penang)、
マラッカ (Malacca) とシンガポール)
の中心都市となったのが1831年、と
するとシンガポールが英国の植民地と
なって30年余り、このホテルは正しく植
民地時代そのものの建造物だったのを知
りました。

創設後100年余りの (途中何度も改
築されたと思いますが) この2階建ての
建物は中庭 (Courtyard) を取り囲み、
中には旅人木※3 (Traveler's Palm) を
初めとする2・3種の椰子の木、他南洋
の草花で飾られ、2・3脚の椅子・ベン
チが置かれ、憩いの場となっています。
上階は並んだ客室、その壁は漆喰白一色、
備品は机椅子、Drawers、ベットの3点
だけ、トイレと洗面は木のドアで別にア
タッチされ清潔に保たれており、湯船は
なくシャワー。オーダーした朝食は白の
制服を着たインド人の給仕 (召し使い)
により運ばれる……。

私は植民地時代に英国からシンガポ
ールにやってきた、夢多き若き旅人と同じ
経験をしたことになったのだ……これは私
の自慢です。

1957年英国より独立したマラヤ連
邦 (Federation of Malaya) の首相トゥ
ンクアブドゥールラーマン (Tunku
Abdul Rahman) が英国政府に後押し
され、発案したパンマレーシア (Pan
Malaysia) 構想が1961年このホテル
で討議されました。その構想はマラヤ連
邦、シンガポール、ブルネイ (Brunei)

サバ、サラワクが一つにまとまろうと言う構想で、これがサバ州とサラワク州がマラヤ連邦に新しい州として加わり、マレーシア (Malaysia) の成立になったと言われています。私は、このホテルが東南アジアの歴史の1ページの舞台だったことを後になって知ることになりました。

サンダカン到着と安部所長

そして飛行機はマレー半島の最南端シラワールを離れ、ボルネオ島の西端の空を飛び、ジェセルトン (Jesselton)、現在のコタキナバル (Kota Kinabalu) に到着、そこでフォッカーフレンドシップ (Fokker Friendship) に乗り換えてボルネオ島の最北端、赴任地のサンダカンに到着。その間、空港がだんだん小さくなるにつれ心細さと不安さが募り始めた頃、飛行場のランウェイに並行してはしる緑濃い椰子農園を機窓から眺め、「なるほど、ここがサンダカン、自分の勤務地なんだ」と納得しタラップを降り、2年前に赴任された日焼けした安部先輩 (サンダカン事務所所長) の笑顔に迎えられました。この安部先輩には南洋材の買い付け、シッパー^{※4}との交渉、契約、船積そして国内販売等全てを教示して頂きました。最も尊敬する上司でした。残念ながら今年2024年2月永眠なされた。合掌。

日本商社のボルネオ進出

日本商社は、North Borneo (ボルネオ島の北部) に位置し、(ボルネオ島のジェセルトンには1963年に開設された日本領事館に領事とその館員だけが駐在されていました、日本社員はいなかったと思います。領事館の現地採用の中国人 (またはカダザン人) の若い女子事務員が、これまた気品のある楚楚とした美人で、独身の私にとってはパスポートの増刷・延長などで領事館を訪れる度にムネドキでした。

サバ政府は、日本商社が開いた事務所を本社との連絡事務所とし、また駐在員を連絡係 (Liaison Representative) という資格しか出してくれなかった。(現在はどうなっているか?) そんな中で三井物産さんだけは戦前に取得された (である) Trading Licence で支店というステータスで木材以外の営業活動もされていました。

因みにジェセルトンという地名は、いずれ後述します英国政府が認知した北ボルネオ会社 (British North Borneo Chartered Co.) の副総裁だった Mr. Jessel に因んでつけられたもので、1967年にコタキナバル (Kota Kinabalu) と改名されたとありますが、此処では暫くジェセルトンと呼ぶことにします。

ATK社の故人の墓碑

実は私は伊藤忠の初代サンダカン駐在の宮所長から1963年 (だったと記憶します) にATK社の若い駐在員がサンダカンの街のホテル (香港ホテル) で駐在まもなく自死されたという事件を聞いて

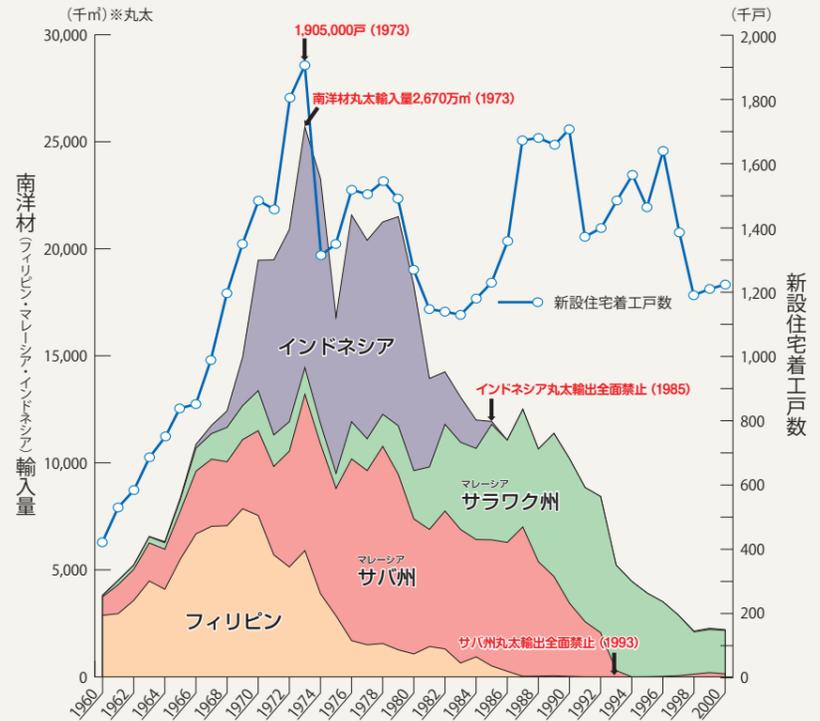


図2 南洋材輸入量の地域別推移と住宅着工戸数の推移

年	南洋材					計	米材	北洋材	NZ・チリ	その他	輸入丸太合計	国産丸太合計
	フィリピン	サバ	サラワク	インドネシア	他							
1960 (昭和35)	2,876	862	69	14	54	3,875	411	879	147	5	5,317	34370
1961 (昭和36)	2,954	1,351	194	14	42	4,555	1,668	1,346	240	10	7,819	34370
1962 (昭和37)	3,572	1,447	198	11	44	5,272	1,467	1,753	230	5	8,727	34370
1963 (昭和38)	4,478	1,776	289	19	123	6,685	2,597	1,753	233	4	11,272	34370
1964 (昭和39)	4,094	1,871	302	50	94	6,411	3,090	2,470	345	17	12,333	35070
1965 (昭和40)	5,505	2,247	538	85	102	8,477	3,549	2,736	415	9	15,186	34742
1966 (昭和41)	6,680	2,930	1,077	175	222	11,084	4,355	3,358	482	148	19,427	35167
1967 (昭和42)	7,032	3,141	1,193	385	406	12,157	6,809	4,682	639	157	24,444	34264
1968 (昭和43)	7,062	2,989	1,606	771	342	12,752	9,012	5,871	1,350	30	29,015	32052
1969 (昭和44)	7,855	3,233	1,586	2,270	459	15,403	7,702	5,624	1,635	92	30,456	29685
1970 (昭和45)	7,542	3,960	1,872	6,090	773	20,237	9,919	6,941	1,677	48	38,822	28140
1971 (昭和46)	5,701	4,131	1,472	8,181	774	20,259	7,524	6,540	1,703	66	36,092	27180
1972 (昭和47)	5,136	5,409	1,377	8,977	826	21,725	10,087	7,173	1,807	80	40,872	27323
1973 (昭和48)	5,899	7,304	1,241	11,244	1,101	26,789	10,062	8,190	1,692	158	46,891	26912
1974 (昭和49)	3,886	6,997	947	11,450	928	24,208	8,696	7,150	1,090	308	41,452	23184
1975 (昭和50)	2,853	5,957	702	7,299	522	17,333	9,297	7,206	444	54	34,334	21581
1976 (昭和51)	1,692	8,490	1,738	9,656	597	22,173	10,257	7,858	818	50	41,156	22037
1977 (昭和52)	1,501	8,137	1,487	9,272	550	20,947	10,191	8,572	956	52	40,718	21184
1978 (昭和53)	1,559	9,212	1,496	8,986	546	21,799	10,536	8,728	907	76	42,046	21079
1979 (昭和54)	1,264	8,200	2,268	9,769	581	22,082	12,335	7,843	1,185	106	43,551	22064
1980 (昭和55)	1,073	6,306	2,260	8,640	677	18,956	10,442	6,119	1,076	167	36,760	21467

表1 主要輸入材 (丸太) 実績 (図2・表1については、日本木材輸入協会資料を元に、PLY編集部で作成)

面積は世界第3位。1位はグリーンランド、2位はパプアニューギニア。North Borneo は面積でボルネオ島の凡そ25% を占める地域のこと、国名ではありません (ここをフィリピンの次の南洋材供給地と決め、1962年からその North Borneo の大半を占めるサバ州とサラワク州に木材担当の駐在員を送り出し始めました。伊藤忠も1962年に最初の駐在員官先輩をサンダカン事務所所長として派遣し、2代目笹田所長、3代目安部所

長、そして私は安部所長の部下、即ちセカンドとして増員派遣されたわけ。私が赴任した1966年5月の時点で、既に大小の商社或いはその代理店が駐在員や長期出張員を派遣、或いは派遣を計画していました……三菱、三井、住友、伊藤忠、丸紅、住林、兼松、東綿、日綿、日商、岩井、安宅、日比、湯浅、長瀬、川商、有孚公司、三露、上田商会等です。これほど多くの企業が短い期間に木材の買い付け輸入に動いた訳は、大

戦で疲弊した日本の住宅産業の復興が必須だったからです。私の赴任時にはサンダカンに凡そ30人、サラワクのミリ (美里= Miri) に2~3社 (数人)、ラハドダツ (Tahad Datu) に戦前からの日産農林さんが事務所を構えておられました。タワオ (Tawau) は各社サンダカンからの出張でカバーされていたと記憶しています。その頃の駐在員は殆どが独身或いは単身者で、家族帯同は安部所長ともう1社日

ていました。宮所長は他社の駐在員3~4人と共に、地元警察に報告、本社に電報連絡、葬儀、茶毘など一切を執り行ったと言っておられました。若年の彼、大きな市況変動の中、取引先との軋轢に悩んだのが原因とも聞かされていました。赴任したばかりの私にとっては自分の事のように胸が締め付けられる話でした。しかし1966年私の駐在時には葬儀に

関与した宮所長を含め他社駐在員の方々は全員帰国されており、現に駐在されている誰が知っているのか知らないのかその事件のことを話題にされない、ATK社の次の駐在員に聴くのもよろしくないと思います、まず墓碑などないかと車であちこち探していたところ、サンダカンの後ろの丘陵にあるサンダカン市長公邸の近くに見つかりました。記憶するに、草に覆われた結構大きい盛り土に建てられた角材に故人の名前が墨で書かれていました。私は、ほぼ同年だった駐在員の自死を思い、ひとり静かに黙祷を捧げました。その墓碑は、1975年ごろサンダカン八番娼館の作家山崎朋子氏が北ボルネオ水産会社のKMさんとの合同調査で発見した、現存する木下くにさんの日本人墓地とは違うところに立っていました。しかし、残念ながら1975年頃には政府の公的な施設の拡張で、その墓碑は無くなっていました。

※1 ラワン

タバガキ科の3属(Shorea属,Parashorea属,Pentacme属)に属する樹木の総称でフィリピンでは一般的にラワンと呼ぶが、マレーシアのサバ州ではセラヤ、インドネシアではメランティと呼ばれることが多い。これら3属には11樹種が含まれ、ホワイ、イエロー、レッドラワンの3グループに分けることが多い。クルイン(アピトン)は同じフタバガキ科でもDipterocarpus属で、カポール(カプール)はDryobalanops属である。フタバガキ科の樹木は約500種類くらいがあるとされるので、材質評価などについては注意が必要である。

※2 カランパヤン (kalampayang)

アカネ科の樹木で樹高40m、直径は50cmほどになる落葉樹。マレーシア及びインドネシアにおける名前だが呼び名は多数ありインドからオーストラリアまで広く分布する。1930年代から早生樹として試植、造林されてきた。木材は軽軟で加工しやすく、玩具、内装材、合板用材などに使われている。

※3 旅人木 (Traveler's tree) Traveler's Palm と呼ばれる

Ravenala属のマダガスカル固有種だが、ヤシの木の幹に扇子を取り付けたような特異な色と形から世界中で観葉植物として愛されている。名前の由来は葉に水を貯える性質があり、扇状の葉が東西方向に展開して道標となって旅人を助けることからともいわれている。樹幹はヤシに似ており樹高は8mほどになる。

※4 シッパー

荷送人または荷主のこと。東南アジアにおける木材の輸出者。——谷山様の寄稿は、この誌面では収まりきりませんでしたので、全文を皆様に読んでいただけるよう思案中です。(編集部)

編・集・後・記

我が国の木材産業は、長年にわたり産業基盤を支えるために多くの木材を輸入に頼ってきました。しかし、近年では国産材の自給率が徐々に向上し、更なる木材資源の効果的な利活用を図ることが求められています。このような観点から国産木材製品や木造建築、さらに先進的な建築技術等の輸出事業は、重要な施策になりつつあります。これにより、我が国の木材資源の有効利用が促進され、炭素固定に寄与する森林の更新など山の活性化が実現可能となります。巻頭言インタビューでは、「(一社)日本木造建築海外推進協議会」における木材製品や木造建築物の海外輸出、さらに国内外における各種情報発信の取り組み等について詳しくお話を伺いました。ホアラカルトでは、木材産業に多大な貢献があった東南アジアを中心とする南洋材の輸入において、日々奮闘されていた先達に当時の諸活動等について、ご紹介を頂きました。(S)

木材・合板博物館のご案内 <https://www.woodmuseum.jp/>

開館時間 10:00~17:00 (最終入館時間16:30)

休館日 月曜日、火曜日、祝日、年末年始 ※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。 ※都合により開館日・時間を変更する場合がございます。

所在地 東京都江東区新木場1-7-22 新木場タワー3F・4F TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602

入館無料

facebook HP Map